

タマネギの特産地

努力を怠らない人びと

東区への入植者には努力家で研究熱心な人が多く、北海道庁の書類に「能く労働ニ耐へ、勉強モ又他ニ勝ル」「農業一途ヲ目的トシテ、益勉強ノ状態」(一八八六(明治十九)年北海道庁調)と記されています。

外来のタマネギが畑の土になじみ、形の良いものを安定して生産できるようになるまでには、多くの月日を費やしました。試行錯誤の末、一八八四(明治十七)年、初めて統計上にタマネギが現れます。この年の収穫高は、十四貫四百目(約五十四キログラム)でした。

はじめのうちタマネギは消費者になかなか受け入れられず、流通経路も確立されていませんでした。タマネギ農家は東京でチラシをまくなどの営業活動を行い、次第に需要も高まっています。



収穫作業のようす(昭和63年)

一九〇二(明治三十五年)年に、「札幌村」(現在の東区の大部分を占める地域)が成立して村会ができること、

タマネギ農家の主だった人たちは進んで議員になり、栽培技術の改良と普及に当たります。こうして、土作りや種作り、農具の開発などの創意工夫を続けて「札幌黄」という、甘味の強いタマネギを作り上げました。



昭和22年のタマネギ畑(写真:札幌市写真ライブラリー所蔵)

タマネギを地域の特産品にしようとする取り組みにより、昭和の初めころには、ほとんどの農家が、タマネギ栽培中心に切り替えます。現在「札幌黄」の作付面積は減り、交配種の生産が中心になっていますが、かつて「札幌黄」は、北海道のタマネギ栽培の主役でした。



現代のタマネギ栽培

受け継がれていくタマネギ畑

栄東地区に住む長太雅則さん(38)は、四代目のタマネギ農家です。初代の助馬さんは、一九〇三(明治三十六)年、富山県から烈々布(現在の栄町付近)に入植。馬を使って木の根を抜くなどの大変な苦勞をして畑を切り開いたそうです。

タマネギ栽培は自然が相手の大変な仕事ですが、雅則さんは「先祖代々続いてきたタマネギ栽培には愛着があります。これからも、できる限り長く続けていきたいですね」と話してくれました。



長太雅則さん

強い日差しの中での草取り

◆ ◆ ◆
 まちの発展を見つめてきたタマネギ畑は、こうして次代へと受け継がれていきます。それとともに「タマネギの里」東区を築いた先人たちの努力もまた、後世へと語り継がれていくことでしょう。

歴史ブックレット

『まちの歴史講座』を配布中

区の歴史をやさしく紹介したブックレット『まちの歴史講座』(全二巻)を無料で配布しています。

元北海道教育大学教授の君尹彦さんが、先人の歩みを生き生きと解説。第一巻では、アイヌ民族の社会から幕末期までを、第二巻では、明治初期から一九〇二(明治三十五年)年ころまでの歴史を紹介しています。

今月の特集の内容の大部分は、このブックレットに基づいています。まちの歴史についてもっと詳しく知りたい方は、ぜひこの本をご覧ください。

◆ ◆ ◆
 昔のことを知ることによって、東区を再発見できるかもしれませんね。

●配布場所

東区役所1階14番窓口、東区民センター、区内各連絡所・地区センター



成り立ちが、分かって書きやすくて、東区にありありとあります。

